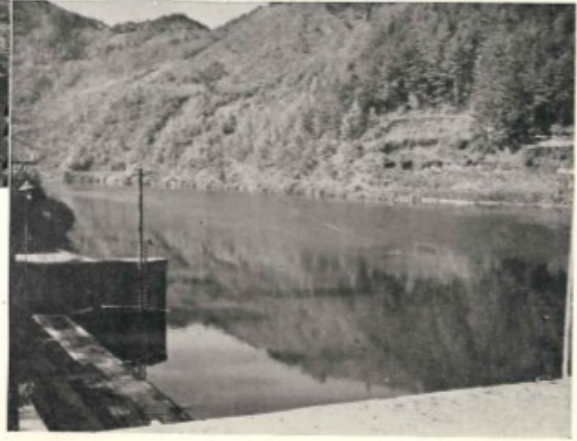


第17編 観 光



勝山城跡

川茂堰堤



裏三ツ峠七福の滝



鹿留の桜





桂川のアユ釣り



八潮祭の大名行列



八朔祭

八朔祭(余興)



第17編 観 光

史 蹟 名 勝

勝 山 城 趾

この山は、正八幡の神祠ありしを文祿3年浅野左衛門佐領地の砌、西南の方八窪山に神祠を移して城を築く。前は桂川西より東流して源昌に至て西北に繞り、又西南より北に向つて勝山の裾に堀を構え周囲凡18丁高さ1丁許、上平坦にして方40間許、北に差出たる平地あり御茶壺藏と云う。慶長、寛永の頃は夏月の間腹に御茶壺岩殿山に置しが秋元氏在城の時よりこの山に移し置かると云う。東に出たる地を焙硝藏と云う。中に空堀あり裾は桂川に臨み自然の要害なり。城南に橋を架け平地に館舎を営す。此地東に續て本丸二丸三丸の名あり、其東南は皆家中屋敷なり両谷村の間の広小路は追手先なり。浅野、鳥居、秋元三代かわるがわる此城に居、宝永2年廢城となる。城下町文祿の頃までは上中下と三町なり。後分れて數町となる。東方郊外を竹カ鼻と云、端門を陣門と云。町に入て東南に行くこと2丁許り是を横町と云。西南に折て下町、中町、新町、早馬町、上町、下天神町、上天神町、袋町、裏天神町合せて十丁往昔城下のまゝにて今存せり。御代官陣屋あり、屋敷千八十坪宝永2年廢城のとき秋元家臣高山源五郎が宅を残し轉て陣屋に用至今如旧（以上甲斐志料集成より）

現在では城山と呼び頂上よりの展望よく児童生徒家族行楽の場所として賑う。

田 原 の 滝

或は佐伯滝ともいふは地名にとれるなり、又十日市場の滝といふは、地は谷村につけども滝は半丁許り西にありて十日市場の部落に近きゆゑなるべし。桂川の岸に臨みて田原浅間明神の祠あり、其の上に河水高みより懸流となりて漲り落ること六七丈東の鯉より望めば白虹の間に飲む形状なり。古時は滝の東鯉より突出たる巨岩あり、其の岩より向の岸に橋を架し十日市場の東頭へ出しとぞ。元祿の頃に至り岸崩れて橋落ければ遙の上流に橋を架けて往来せしを近頃旧所に後し滝の上に架たり長六丈余巾一丈高欄を施して其製猿橋に同じ。然ども大瀑の上に架けたるは更に奇観とす。この橋を佐伯橋というも旧き名を取けるなり口碑に傳へる歌とて

名にたてる富士の一ねの滝なれば
流れも遠く響きこそすれ

この歌によりて一根滝とも呼ぶとなん又此より東上野原辺にてはこの滝の音聞ゆるをもて晴天の候とするという。昔時芭蕉も此地に遊びて一詠を残せり

きほひあり 氷柱きえては 滝津魚

以上甲斐志料集成より

御 正 体 山

本市のはぼ南端に位し標高 1,682 米丹沢山塊に連なり、山頂の展望雄大にして殊に富士の眺望よく焙岩流の形態及び裾野形状等の研究視察に絶好の地である。山頂に古祠あり四季登山客あり山麓小野部落及び鹿留部落に昔よりの御司今もあり。

裏三ツ峠

三ツ峠駅口を表とするときは本市よりの登山口は裏口となり、途中初滝、三段の滝、七福の滝、白龍の滝等が岩をぬつて流れ見事な景観をなし、これらの諸滝を称して千段の滝と呼んでいる。頂上近く「猿遊岩」「夫婦岩」などの奇岩があり春のつじ、秋の紅葉は素晴しく「岩鏡」その他の高山植物の群落地帯でもある。

生出神社

赤坂停留場より5分四日市場にあり、祭神は建御名方命、祭典は9月1日で八朔祭と称され神輿渡御と10万石の格式を以つてする大名行列の古式を行う外各町挙げての催し物がある。

石船神社

本市禾生駅より四軒、朝日馬場にあり神体は石器（石船、石剣、石斧）であり、護良親王の御首級及び懐剣と云われるものが所蔵されている。

川茂堰堤

禾生駅より徒歩5分、桂川を堰止め東京電力株式会社において出力2,400KWの発電所を設けたもので湛水面積458m²、湛水量23m³ 個で四季の釣に適する外春の新緑、桜。秋の紅葉は水面に映えて美観を呈す。

アツツ観音

昭和18年北海の孤島アツツ島において世界平和と祖国安泰を祈念しながら莞爾として散華された山崎部隊長以下 2,638 勇士の英霊は今大終戦の結果、その遺骨は10年間も永雪に晒されていたが昭和28年故国え声なく帰られた。その菩提を弔らうと共に世界恒久平和祈願のため、部隊長が成長したゆかりのある保寿院には奉讃会により観音の像が立てられている。高さ1丈6尺有、赤坂停留所より徒歩5分の位置にある。

鹿留の桜

東桂駅下車徒歩10分、東京電力株式会社鹿留発電所の周囲より水槽に至る一帯に植えられた樹令約40~50年の桜で「鹿留の桜」として知られる。水槽に登れば四圍の眺望よく開花期の絶景は新緑と花霞につつまれて美しく行楽する人々の目を楽しませてくれる。

宝鏡寺山

高さ50米、周囲1軒ばかりの小山で北側に宝鏡寺があり、頂上には慰霊碑その他の碑がある。この山は高くはないが孤立しているから周囲一体を眺めるには都合がよく、周囲には桜、つじ、その他の針葉樹が植えられ、鹿留の桜と隣接して開花の折は美しい。

桂川の峡谷

桂川は長い間富士焙岸の中を流れて居るために浸蝕が深く、兩岸の絶壁が高いので珍らしい眺めに富んでいる。殊に東桂小学校の裏辺りから田原の滝までの眺めは最も面白いものに属する。富士山研究で名高い石原学士は此の辺を研究して、この珍らしきは日本にも数多くはないといつて居る。これはこの附近一帯の兩岸及川床が魚鱗の様で水の潤れた冬の日など桂川が一足に跨げる。其処は水が焙岸の下を通つて岩と岩との狭い間を流れ落ちているからである。又この辺からは巾4米高さ5米ばかりの焙岩の橋が約500米の間を通っている。北の辺一帯を徳富蘇峰先生は特に「蒼龍峡」と命名した。

伝 説

お な ん 淵

東桂駅下車徒歩約10分、鹿留川の下流にあり、住吉神社の麓で滝をなしている。滝の高さは5米ばかりであるがその左右には高さ10米、巾30米もある屏風岩が立つており、その下に瑠璃を解いたような昔から底知られぬ底なしの淵とうたわれる淵がある。

此の名の由来に二説ある。一つは古渡山がすつと尾を長く引いて住吉山につきている。そこにあるから尾長淵というのと、今一つはをなさんが身を投げた所であるからおなが淵というのとである。

おなが淵は明治30年代中谷無涯の緒名が淵と称する詩によつて天下に伝えられた。中谷無涯は谷村長安寺に居た人で幸田露伴の友人である。その詩集「すひかつら」は緒名が淵外一篇を収めたもので緒名が淵は85頁からある長詩である。

露伴はこれを紹介して、甲斐の一深潭、緒名が淵と称するものの傳説に基づいて作れるもの詞藻富麗神気尙爽大いに時流と異なるものあり、といつている。その詩の大意は

「この里にある賤の女と長者の娘とが一人の男を中心に戀を争う。その時領主が長者の娘を垣間見てこれを側室にと望み、相手の男を邪魔なりとして捕えて殺す。そこで2人の娘は相ついでこれに殉じて淵に身を投げる」というのである。これはこの地の傳説とはいささか異なつて居るけれども詩人筆端の走る所、また止むを得ない事であろう。

烽 火 台 跡

谷村の東円通院の後の高く尖りたる石山なり。谷村にては乙岩といふが接辺の村にては茶臼山と呼び法能の方にては獅子岩と称へ見る所により其名換れり。此の山中腹を廻らして段をなし少しく平地あり。嶺上は岩石削成たる如き所に少許の平坦あり頂の峯三つに分て壑の跡存れり各々二丈許なり。古小山田氏の置きたる烽火台の跡なりと云傳ふ。(甲斐志料集成より)

儀 秀 稻 荷 社

寛永10年(1633年)郡内領主として秋元公入国に当り、邸内に先祖の靈と共に祠られたのに創る。家法により藩主喬朝公の名(義舟大居士の同音異字)を冠して儀秀稻荷社と称した。宝永2年秋元公川越へお国替に際し西涼寺山内へ遷座。以来250年、昭和24年谷村町大火に、烈風業火の中、社殿の安全を得崇敬奉賽する者多し。